

2023年7月16日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

エゼキエル書 18：21～23

マタイによる福音書 18：15～20

「鍵の務め」

(ハイデルベルク信仰問答 問 83～85) ※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

【招詞】申命記 6：4～5

【讃美歌】24「たたえよ、主の民」

【詩編交読】詩編 6 編

【赦しの宣言】イザヤ書 55：7「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。

わたしたちの神に立ち帰るならば／豊かに赦してくださる。」

【讃美歌】7「ほめたたえよ、力強き主よ」

【祈祷】

【聖書】エゼキエル書 18：21～23、マタイによる福音書 18：15～20

【説教】「鍵の務め」

<天の国の鍵>

『ハイデルベルク信仰問答』の第二部の最後のところになりました。最後の問 83～85 では、「鍵の務め」について語られています。

「鍵の務め」とは、キリストの教会に与えられているものです。この鍵は、天の国の門を、開いたり、閉じたりする鍵です。天の国とは、神さまの恵みのご支配があるところを意味します。つまり、神さまの救いの恵みの中に、入るか、入らないか。その重要な鍵を、教会が与っているのです。

この「鍵の務め」を具体的に行使するのは、わたしたちの教会で言えば、選挙で会衆の中から選ばれ、教会の信仰的な務めを委託されている長老たちと、牧師による、長老会ということになるでしょう。

でもこれは、牧師や長老会に、あの人は天の国に入れる、この人は入れない、と決める権利がある、と言うものではありません。そんな権利や資格は、どんな人間にもありません。

そもそも、わたしたちは皆、天の国に入ることのできない罪人でした。神さまに背き、自己中心的に歩んで、神さまから離れ、天の国から自ら遠ざかって、自分自身を締め出していたのです。

でも、この天の国を開いて下さったのは、神の御子イエスさまでした。イエスさまは、ご自分の十字架の死によって、わたしたちの罪を完全に償って下さいました。すべての造られた人間のために、イエスさまは救いの御業を成し遂げられました。

このイエスさまの救いの御業を信じて、受け入れるということが、神さまの救いの恵みのご支配の中に入る、ということであり、天の国に入る、ということです。

天の国とは、死んでから行くところのことではありません。今この時から、わたしが神さまの恵みの中で生き始めるなら。罪の赦しを信じて、神さまの子どもとされて生きていくなら。そこに、天の国は始まっているのです。

ですから基本的に、天の国はイエスさまによって、開かれているのです。すべての者が招かれており、神さまは、すべての者が、ご自分の救いの恵みの中に入ってくるのを待っておられます。

では、教会に天の国の「鍵の務め」が託されている、とはどういうことなのでしょう。

根本的に、教会とは、イエスさまを頭として、イエスさまに結ばれた者たちの群れですから、この鍵の力の源は、イエスさまご自身にあります。

それを、わたしたちが今生きているこの世にあって、この地上にある、目に見える教会において、その力を具体的に行使するようにと任されている。それが、「教会に鍵の務めが託されている」ということなのです。

今日のマタイによる福音書 18:18 に、「はっきり言うておく。あなたがたが地上でつなぐことは、天上でもつなぐれ、あなたがたが地上で解くことは、天上でも解かれる」とありました。これが、教会の「鍵の務め」のことです。

鍵でつなぐ、というのは、つまり門を閉じること、入るのを禁じること、を意味します。一方で、鍵で解く、というのは、門を開くことであり、入るのを許可すること、赦す、ということなのです。

この教会の「鍵の務め」は、地上を歩む教会において、宣べ伝えられた福音が、正しく、恵み豊かに聞かれるため。そして、洗礼や聖餐の聖礼典が正しく行われるためにあります。

それは、そのことによって、教会に集う人々が、神さまの御言葉によって、また聖礼典によって、まことに罪を赦され、新しい命に生かされ、慰められ、一致させられ、実り豊かに成長していくためです。そのために、教会が、責任をもって行うべきこととして、「鍵の務め」が託されているのです。

<二つの鍵>

では、今日の『ハイデルベルク信仰問答』の問 83 を見てみましょう。こうあります。

「問 83 鍵の務めとは何ですか。」

「答 聖なる福音の説教とキリスト教的戒規のことです。これら二つによって、天国は信仰者たちには開かれ、不信仰な者たちには閉ざされるのです。」

教会が与っている鍵が、二つあると書かれています。

ひとつは、「聖なる福音の説教」です。礼拝において、聖書の御言葉から告げられる、イエスさまの十字架による救いの知らせです。

そして、もう一つは「キリスト教的戒規」とあります。

そして、問 84 には、一つ目の、聖なる福音の説教によって、どう天国が開かれたり閉ざされたりするのか。問 85 に、二つ目の、キリスト教的戒規によって、どう天国が開かれたり閉ざされたりするのか、ということが語られています。

<聖なる福音の説教>

まず一つ目の鍵は、教会において語られる、聖なる福音の説教です。

聖なる福音の説教とは、神の御子イエスさまが、わたしたちのためにまことの人となり、十字架に架かり、すべての罪を贖って下さったこと。そして、復活させられ、わたしたちに罪の赦しと、永遠の命、復活の約束を与えて下さった、ということ告げるものです。

聖霊の導きの下、わたしたちに、イエスさまの十字架の死と復活の御業が語られる。神さまの愛が語られる。そこでは、常に聞く者に対して、救いの恵みが、罪の赦しが、差し出されています。

それを、自分に与えられたものとして、しっかりと受け取るならば。その人は、イエスさまのゆえに、罪を赦され、新しい命を与えられ、神さまと共に生きる者とされるのです。ここに、開かれた天の門の中に入る者の姿があります。

しかし、その罪の赦しを受け取ろうとしないなら。差し出された救いを拒むなら。その人は自ら、神さまの救いの恵みの外に、天の国の外に、立ち続けることになるのです。

教会において語られる、福音の説教が、それを聞く人に対して、救いを受け取るか、受け取らないか。神さまの恵みのご支配の中に入るか、入らないで外に立っているか。それを分ける、鍵になるのです。

聖なる福音の説教は、いつでも罪の赦しを宣言しています。神さまの御言葉は、聞いた者に罪の悔い改めを求め、イエスさまの十字架の御許に来るようにと招いています。

そして、わたしたちが、まことの信仰をもって、つまり、心からの確信と、信頼をもって、告げられたことを受け入れるなら。わたしたちは、その度に、まことに神さまに罪を赦されている、ということ、確信することが出来るのです。

<キリスト教的戒規>

そして、もう一つの鍵が、キリスト教的戒規です。戒規は、戒める規則と書きます。

これは、洗礼を受けて、イエスさまの十字架の救いの恵みに与った者、つまり教会に属する者が対象です。

救いの恵みの中に生かされているにも関わらず、そのイエスさまの十字架による恵みを否定したり、蔑ろにしたり。あるいは、キリストの教会を汚したり、躓かせたり、分裂させたりしようとする場合には、その人に悔い改めを求めるために、戒規を行います。

問 85 の答えのところには、「キリスト者と言われながら、非キリスト教的な教えまたは行いを為す者に対して、この戒規というものがなされる、ということが語られています。

ですから問 85 の答えの前半は、まず天の国の門から締め出すことが先に語られています。それには順序があって、それは今日読まれた、マタイによる福音書 18 : 15~20 に基づいています。これは、イエスさまの御言葉、ご命令であり、教会の中で、兄弟が兄弟に対して罪を犯したときに、どうしたらよいか、ということが教えられています。

問 85 の答えをかいつまむと、こうあります。「キリスト者と言われながら、非キリスト教的な教えまたは行いを為した者には、まず「度重なる兄弟からの忠告」がなされます。個別に、兄弟同士で教え合い、話し合い、悔い改めを求めるのです。

それでも、「その過ちまたは不徳を離れない者は、教会または教会役員に通告されます」。個別の話し合いで悔い改めに至らなければ、それが、教会全体の問題として取り上げられるのです。そして、教会または教会役員、わたしたちなら長老会となりますが、そこで訓戒を行います。

それでも、悔い改めないならば、「教会役員によっては、聖礼典（つまり聖餐）の停止をもってキリスト者の会衆から（締め出される）、神御自身によっては、キリストの御国から、彼らは締め出されます」とあるのです。

でも、戒規において大切なことは、これは、罪に対する罰や、制裁や、復讐などではない、ということです。もちろん、裁きでもありません。裁きは、神さまがなされることです。

大切なのは、教会が戒規を行う目的は、罪を犯した一人の兄弟を、恵みの群れの中に取り戻すためである、ということです。

ですから、答えの後半にはこうあります。「しかし、彼らが真実な悔い改めを約束し、またそれを示す時には、再びキリストとその教会の一部として受け入れられるのです」。

教会は、罪を犯した者に、「鍵の務め」によって「戒規」を行い、門を閉じ、聖餐の食卓に着くことを禁じ、悔い改めを求めます。

しかしそれは、罪を犯した者に、真実な悔い改めを呼び起こし、イエスさまの十字架による深い恵みを、罪の赦しを、改めて、真実に、正しく受け取らせるためです。

そして、その者が、キリストの体なる群れの中に、再び、受け入れられるためです。

教会は、この目的のためにこそ、その人のために祈りをもって、戒規を行うのです。

<兄弟を得るため>

このことを、より深く知るために、この答えの基となった、マタイによる福音書 18 : 15 以下を丁寧に見てみたいと思います。

まず 15 節にこうあります。「兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところで忠告しなさい。言うことを聞き入れたら、兄弟を得たことになる。」

まず、兄弟があなたに対して罪を犯したら、個別に忠告することから始めなさい、とあります。最初は当事者の間で、罪を告げ、悔い改めを求め、そして、悔い改めたなら、赦すのです。

互いを傷つけたような時に、わたしたちの中には、怒りや、恨みや、復讐心が生まれるかも知れません。あるいは、もう関わりたくない、無視したい、と思うかも知れません。

でも教会は、イエスさまの十字架の許で、罪を赦された者同士が、イエスさまにあって共に一つに結ばれた群れなのです。すでに、同じ一つの体なのです。その中で、傷つけ合ったり、あるいは、そこに存在しないかのように無視する、などということは、あり得ません。

もし、誰かが罪を犯して、体の一部を傷つけてしまったら、心から悔い改めること、また、赦すことによって、和解をし、癒しをもたらさなければなりません。

でも、そのようにして、互いに悔い改めと赦しが実現したならば、それは聖書にあったように、「兄弟を得たことになる」のです。神の家族として、一つの体として、共に歩むことが出来るのです。

しかし、そう出来ないこともあります。16節では、その二人での話し合いで、罪を犯した者がそれを聞き入れなかったら、他に一人または二人を、一緒に連れて行きなさい、とあります。話し合われたことの証人となってもらうためです。

それでも聞き入れなかったら、17節にあるように、教会に申し出なさい、とあります。

もし、一人の罪人が、罪を悔い改めないならば、それは教会全体の問題になります。一つの体の一部分が、分裂しようとしていることだからです。

教会は、罪を悔い改めて、神さまのところに立ち返るように、その人と話し合います。

しかし、それでも聞き入れないなら、「その人を異邦人か徴税人と同様に見なしなさい」とあるのです。「異邦人か徴税人」とは、当時、選ばれた神の民であるユダヤ人にとって、救いの外、群れの交わりの外にいる人々でした。

つまり、悔い改めない人は、教会の交わりの外にいる人と見なしなさい。そう言われているのです。

それが、『ハイデルベルク信仰問答』が言っていた「戒規」のことです。聖礼典の停止、つまり、主の食卓の交わりから締め出す、ということです。

罪を悔い改めようとしない者、罪の赦しを求めない者が、主の十字架の血による罪の贖いを示す食卓に着くこと。イエスさまの裂かれた体と流された血に与ること。

それは、イエスさまの恵みを蔑ろにすることです。また、そのような誤った教えや行いで、他の信仰者を躓かせ、神さまの聖なる群れを、混乱させることになるからです。

「戒規」は、とても厳しい対処です。でも、聖書を通して思い起こさなければならないのは、「異邦人や徴税人」に対して、イエスさまがどう接して来られたか、ということです。

「異邦人や徴税人」とは、「罪人」の代名詞でもありました。しかし、そのような人々のところにこそ、イエスさまは御自分から歩みより、愛をもって語り掛け、御許へと招かれたのです。罪人こそが、罪の赦しへと招かれたのです。

ですから戒規は、一人の罪人が、罪の赦しを得るため。そして再び兄弟として、教会の群れの中に受け入れられるためにこそ、行われます。戒規の目的は、兄弟を得ることなのです。

<神さまの御心は>

18 節で、イエスさまは「はっきり言うておく。あなたがたが地上でつなぐことは、天上でもつなぐれ、あなたがたが地上で解くことは、天上でも解かれる」と言われました。

イエスさまの主権の下で、イエスさまの体なる教会が、神さまの御心として、このことを行うのです。そして、神さまの御心とは、失われた者を見出すことなのです。

今回読まれた聖書箇所直前、マタイによる福音書 18:10~14 までは、「迷い出た羊のたとえ」が書かれています。百匹の中の一匹の羊、たった一人の小さな者でも失われたなら、捜さずにはおられない。神さまは、その小さな一人を取り戻すために、あらゆることをなさるのです。神さまの御心は、14 節に書かれている通りです。「そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない」。

この天の父なる神さまの御心に、教会は従っていくのです。

<祈りをもって>

さて、マタイによる福音書では、この後の 19~20 節で、祈りについて語られています。

「また、はっきり言うておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。二人または三人がわたしの名によって集まる場所には、わたしもその中にいるのである。」

この箇所が好きと言う方も多いのではないのでしょうか。もちろん、一人で祈る時にも、主は共におられ、父なる神さまは心から耳を傾けて下さいます。

でも、ここは、二人または三人がイエスさまの名によって集まり、地上で心一つにして祈り求めること。つまり、教会の者たちが共に祈る、ということ語っているのです。

そして、どんな願い事であれ、心一つにして求めるなら、天の父はそれをかなえてくださる、とあります。教会に連なるわたしたちが心一つにするところは、イエスさましかありません。また、どんな願い事であれ、と言っても、これは、兄弟を得ること、失われた兄弟を取り戻すことの中で願われる、どんな願いでもかなえられる、という意味です。

つまり、鍵の務め、戒規など、罪を犯した兄弟が悔い改め、また教会の人々がこれを赦し、受け入れ、一つとなって歩んでいくための、これらのすべてのことは、イエスさまが共にいて下さる祈りの中で、神さまの御力によってなされていくことだ、ということです。

イエスさまは、ご自分の命を捨てて、わたしたちの罪を赦して下さったお方です。教会にいる、罪を犯した者も、傷つけられた者も、また、その傍にいる者も、みな、このイエスさまに罪を赦された者なのです。

そのわたしたちが、共にイエスさまの、罪の赦しの十字架の御前に立つ。そして、兄弟が立ち返ることを願い、悔い改めへの導きを願い、自分が赦す者となることを願い、一つになることを願うのです。

その時、わたしたちのすべての罪を贖って下さった、十字架と復活のイエスさまは、まさにこの祈りの中に、わたしたちの真ん中に、いて下さるのです。

そして、天の父なる神さまが、この願いを、必ずかなえてくださいます。
兄弟を得ることを願う祈りは、天の父なる神さまの御心に、かなうものだからです。

今日の旧約聖書のエゼキエル所 18：21～23 にもこうありました。

「悪人であっても、もし犯したすべての過ちから離れて、わたしの掟をことごとく守り、正義と恵みの業を行うなら、必ず生きる。死ぬことはない。彼の行ったすべての背きは思い起こされることなく、行った正義のゆえに生きる。わたしは悪人の死を喜ぶだろうか、と主なる神は言われる。彼がその道から立ち帰ることによって、生きることを喜ばないだろうか。」

これが、神さまが望んでおられることです。ですから、わたしたち教会も、この神さまの御心を、わたしたち教会の心として、共に祈り求めていくのです。共にイエスさまの十字架の赦しの許に立ちつつ。天の国に、神さまの罪の赦しの中に、一人でも多くの者が入れられることを祈りつつ、兄弟を得ることを祈りつつ、「鍵の務め」を果たしていくのです。

そうしてわたしたちの教会は、救われた者の群れは、ますますイエスさまを頭とする、一つの体として一体となり、御言葉に生かされ、聖餐の食卓に養われ、愛し合い、励まし合い、祈り合う群れとして、成長していくことが出来るのです。

【お祈り】 天の父なる神さま

あなたは、わたしたち、教会に、「鍵の務め」をお与えになりました。

それは、神さまの御心を、この地上にある教会が、具体的に実現してゆくためです。

小さな者を一人でも失うことを望まれない、その父なる神さまの御心に、わたしたちが祈りをもって従うことが出来ますように。そして、わたしたちを用いて、あなたが御心を実現して下さい。

わたしたちは、罪を赦された者の群れでありながら、なお多くの罪や、課題や、問題を抱えています。しかし、わたしたちが共に祈るその真ん中に、いつも、わたしたちのすべての罪を背負い、そして贖って下さったイエスさまがおられます。どうかイエスさまにより頼むことによって、わたしたちが、常に悔い改めの心を持つことが出来ますように。また、互いに愛し合い、赦し合い、祈り合う、一つの体として、生き活きと歩む教会となることが出来るようにして下さい。

そして、この、罪を赦され、イエスさまと共に生きる恵みの群れに、一人でも多くの者が招かれますように。救いの恵みを受け入れて、お招きに応えることが出来ますように。

このお祈りを、イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讃美歌】 441 「信仰をもて」

【信仰告白】 ニカイア信条

【十戒】

【献金】 65-1 「今そなえる」

【主の祈り】

【祈祷】

【讃美歌】 29 「天のみ民も」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン